

我が輩は鼠である。

かたかべ みつぎ
片伯部 貢

有名な小説家夏目漱石氏は『我が輩は猫である。』という小説を書いていますが、正しくは「我が輩は鼠である。」と云うのが正しいのではないかと私は想っています。何故ならば猫は一寸苛めただけですぐ毛を逆立て泡を吹いて怒ります。又ライオンも同じです。

この二種類の動物は大小の違いこそあれ、元来親戚関係にある肉食動物であります。一方、兎やモルモットの様な動物は苛めても唯逃げるだけで反抗しません。この両者の差は何に起因するのか？それは副腎にて分泌されるノルアドレナリンとアドレナリンと云うホルモンの分泌量の対比によって決まるもので、攻撃的で怒り易い動物はノルアドレナリンが多く、反対に受動的で驚き易い動物はアドレナリンが多いとされています。

その対比は、猫を100%とした場合、兎は5%、モルモット10%、鼠は20%とされています。

人間は大体20%とされていますので兎ほどではありませんが、大体鼠と一緒に、矢張りストレスには弱い動物のグループに入ります。この事が「我が輩は鼠である」と小生が唱えている理由が有る訳です。

鼠はその最大のストレスである猫を見たら逃げます。そして、進退極まったら窮鼠猫を噛みます。人も又同じでストレスが強ければ逃げます。そして最後は居直ります。

肉運の秘法
有難うございませう
感謝します
私には運がついてます

アリ トウゴザイマシタ
実践が十後財増多

(筆者自筆の人生訓)

をうけて合格した人達の初年兵教育は原隊で受けるのですが、次々と徴兵されるので兵舎に空き部屋がなく、従ってそのまま戦地に派遣されて戦地で初年兵教育をうけていたので、帰路は軍医も同行して戦場にもどって行っていたのですが、小生に更に別の任務が与えられていました。それは小生等の上師である旅団長(少将)の前任地が熊本第6師団だったのです。この人が皮膚が弱くて、いつも尋麻疹になやまされ指揮がとれにくくて困っていたのです。

唯、上師曰く「自分にはムトウハップがよく利くのだが現地にないので、熊本の旧部隊に行つて、もらつてくるように。」との使命。従つて小生は部隊とは離れて単独で熊本に行き、帰りには長崎から船で上海に渡り復師する予定で船に乗っていたのです。そこに税関職員であった父親がのりこんできて「この船から下りて後の船に乗れ」と云うのです。小生は「いやだ、この船が早く出るので一日も早く復帰したい」と云つたら、父が「いや、この船より後の船の方が早く着くから是非とも後の船に乗れ。」と云うて無理矢理私をひきずり降りて波止場のトイレにつれて行き、次の話をされました。「俺はいつも軍用船を見ているのだが、時々不思議な事が起るのだ。軍用船には、食料事情が悪い時代ではあるが、戦場では食料が必要だから、沢山の食料品をつんでいるのだ。鼠はこの事をよく知つていて、軍用船は鼠にとっては極楽の地のはずが、時々此の鼠等がロープを伝わつて船から降りて逃げる事がある。不思議な事に、この様な船は、必ずと言っていい程沈んでしまう。その事を鼠がなぜか沈む船であると言ふことを察知できるようだ。今乗ろうとしている船がまさにそれだ。」と言われた。私は仕方なく後発の船に乗つたのです。すると果せるかな先発の船は港外の軍艦島周辺でアメリカの魚雷をうけて沈み、多くの死傷者を出してしまったのです。

数日前新聞の広告を見ていたら「鼠には予知能力がある」と戦時中軍用船の船長の書いた本の広告がありました。鼠ちゃんの御蔭で私は命をひろつたのです。鼠ちゃん有難う。

でも小生シベリアに抑留されている時、食べものがなつかたので、私にとつてこの大切な恩人鼠ちゃんを殺して喰べてしまったのです。鼠ちゃん御免なさい、許して下さい。

南無阿弥陀佛。

(95歳旧病院長)

鼠を使った研究が有ります。

鼠をAグループとBグループに分けて育て、Aグループにはカルシウムを充分に含んだ食品を与え、Bグループには全くカルシウムを含まない食品を与え続けて見た場合、Aグループの鼠には手を差し入れても極めて柔順で何事も起こらないが、Bグループの場合は手を差し入れると噛みついたり、暴れたりする行動を起こすのです。

カルシウムには昔から精神安定作用があると云われており、漢方の竜骨ボレイトウにはカルシウムが多量に含まれています。

以前、連合赤軍の浅間山山荘事件等でかずかずの殺人事件が有りましたが、何故常識をはずれたあの凶悪な行動を彼等が起こしたのか？数々の謎の要素があげられましたが、動かし難い大きな証拠がみつかりました。それは、彼等が購入した金銭出納記載の書類でした。青野菜の記入が全く書かれていなかったのです。

そしてそれはカルシウムの不足を意味します。春や夏場であればワラビ山菜等で代用できたはずなのに冬の出来事で一〇〇日間山肌は深く雪に覆われ、それらの物を口にする事が出来なかつたわけです。人間は犯罪ばかりでなく、日頃の性格や行動までも、その人それぞれの日常生活によって大きく支配し左右されるものである事を鼠等が私達に教えてくれたのかも知れません。

小生が軍人として中国北支の戦場にある時の話です。

当方の原隊は東京の近衛師団だったので、現地より東京の原隊に行き来する仕事があつたのです。それは軍医として徴兵検査の仕事です。男子は二〇才になつたらすべて徴兵検査を受けねばならなかつた訳ですが、それらの人達は東京を中心とした周辺の県の人達がすべてでした。九州の人間は近衛師団には小生一人だけだったので、普通通常検査

風信

○四月、新学期を迎えました。本会事務局も異動あり。今月より末吉女史が本会事務局担当となりました。

○今月より毎月の第二、第四金曜日午後二時より開催して参りました講座名を「長崎歴史茶話会」と改め開催いたします。(自由参加・会費不要)脇山壽子女史、大東良平氏、津田尚美女史、高岡絹子女史他を中心に。

○長崎九条の会幹事会あり。本年の第十一回「憲法さぐる」を例年のように五月四日(みどりの日)に左記コースにて開催するので「子供連れで御自由にご参加下さい」との事(参加費不要)

コース 集合・午前十時、蜚茶屋一ノ瀬橋付近。長崎の石橋をめぐる。講師・山口広助、田中安次郎、大東良平、内川雅夫、吉野誠次、陸門良輔他(県九条の会主催)

○四月二十一日 お大師様の日です。各町内にはお大師様が祀られています。お接待も戴きました。

○四月は長崎のハタあげの日でした。先日テレビで長崎風頭の小川ハタ店主の御話をききました。長崎市の民俗無形文化財に指定されておられるのでしょうか。

○文化財と言えば、先日玉園町の旧迎陽亭の史跡拝見に参加しました。「幕末の頃、杉山氏が旧遠見番山本氏の宅地を譲渡され奉行所各藩集会所となし仁和寺一品親王より迎陽亭の名称を拝受……」等と書かれた旧記を拝見、又、明治以来、漱石・芥川・吉井勇の各先生等多くの文人も迎陽亭を訪ね、残された筆跡を拝見しました。この地も長崎の文化財に指定保存すべき処ではないかと考えさせられました。

○今月ご寄贈いただいた書籍

一、喜田信代氏より、自著の『天主堂建築のバイオニア・鉄川與助』長崎の異才なる大工棟梁鉄川氏の伝記を中心に其の活躍を詳述されていました。感激して読ませて戴きました。(日貿出版社・二八〇〇円十税)

一、示車右甫氏より自著の『天主堂二人の工匠』工匠の二人とは小山秀之進と鉄川与助。明治期の長崎における教会建築士二人の伝記に接し、何か感じさせられるものがありました。(海馬社出版・一八〇〇円十税)

一、山口広助氏より自著の『長崎游学12』ヒロスケ長崎ぶらぶら歩き、旧長崎市内を広助流に良く解説されていた。(長崎文献社発行・一〇〇〇円十税)

一、小園晃司氏より『北九州市立大学紀要一四三号』同化与差異化・浅淡文化的重拘及其内在条件——以日本長崎的中国民俗活動爲例——すべて中国文でした。

一、チャータール会長崎より『第百回絵画展記念画集』(平28・11発行)

長崎歴史文化協会研究室

TEL八二二一五四〇
十八銀行公会堂前出張所二F



カット 中村 繁務 なんはんえびす